

2022年
6月

マナ通信



今月のマナ通信は、

◎4月の聖書日課（詩篇）
◎土・日曜日の学び（十字架、復活、昇天、イエスの弟子たち）の感想です。

私のたましいは黙って ただ神を待ち望む。

私の救いは神から来る。

神こそ わが岩 わが救い わがやぐら。

私は決して揺るがされない。（詩篇62:1-2）

民よ どんなときにも神に信頼せよ。

あなたがたの心を 神の御前に注ぎ出せ。

神はわれらの 避け所である。（詩篇62:8）



本当に力強くて、神に対して確信に満ちた祈り、叫び、賛美の詩です。ダビデという人物をもっと知りたくなり調べてみました。以下は、聖書の達人—新聖書辞典（ダビデ）を参考にしてまとめてみました。

ダビデは油そそがれた王であった。サウルは神のおきてに従わず、神から見捨てられ、次期王をエッサイの子の中から選ぶことを預言者サムエルに示し、そこでサムエルはエッサイの8番目の子ダビデが王となることを示されました。

ダビデはユダ族でベツレヘムに住むエッサイの息子で8人兄弟の末弟でした。彼は血色がよく目が綺麗で、姿も立派でした。その上、琴が上手で勇士であり、戦士でした。

立琴の奏者として宮廷に召され、サウル王に仕えるようになりました。宮廷で次第にその才能を発揮し、ついに側近の兵士「道具持ち」に登用されました。

その後、ダビデの名を一躍国中にとどろかせる出来事が起こりました。イスラエルを罵倒するペリシテ人の巨人ゴリヤテを石投げの石1つをもって見事に倒しました。

以来、ダビデは戦いのたびに名をあげ、サウル軍の最高の地位までのぼりつめました。こんな時、「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」と女たちが歌うのを聞きました。

この歌はサウルとダビデの間に決定的な亀裂をもたらしました。そして、妻ミカルの助言により、窓から脱出し、宮廷を後にするのです。

宮廷を去ったダビデは、神の導きを仰ごうとして、預言者サムエルを訪ねようとするのですが、サウルに追われ事がうまく運ばず、アドラムの洞穴に逃避したり、モアブのミッパ、ハレテの森などを放浪することになります。

荒野放浪時代はダビデにとって神の訓練を受ける時でもありました。たとえ荒野であっても神はダビデと共におられ、ダビデを祝福しました。特に、自分のいのちを執拗にねらい続けるサウル王に対して「主が油注がれた者」として敬意を払い続けたのです。これは、サウル家の復讐を恐れたのではなく、神の権威と秩序を深く信じ受け入れていたからです。

しかし、ダビデの信仰が完全無欠であったという訳ではなく、多くの弱さと罪を露呈させながらも、絶えず砕かれた心を持って悔い改め、神の赦しと恵みを味わい続けたのでした。

荒野の逃亡生活、罪を犯した時の苦悩、息子に裏切られた経験などは、ダビデの神体験を深め、たましいの深みにまで迫る多くの詩を生み出させました。（畑中伸之）

私のたましいよ 黙って ただ神を待ち望め。

私の望みは 神から来るからだ。（詩篇62:5）

民よ どんなときにも 神に信頼せよ。

あなたがたの心を 神の御前に注ぎ出せ。

神はわれらの 避け所である。（詩篇62:8）



子供の頃からよく聞いた言葉ですが、「もの言わぬは腹ふくるるわざなり」（吉田兼好）と言って、黙って何も言わないと、「何を考えているのか分からない、体に良くないから黙っていないで話しなさい」と親にも言われました。しかし、何でも話して良いものか、話して後悔することもあるでしょう。

今、私は神様に祈ることが出来る特権にあずかっていますことを、心から感謝しています。神様は、私が祈る前からすべてをご存じで、祈りながら導かれていますことを感じる事があって、とても励まされます。

お祈りは、たましいのためには呼吸であり、心の栄養になっていると思います。なんという恵み、特権でしょうか！（福島三弥子）

主の十字架にかかれる迄の一週間の出来事に、年々感謝の気持ちと、この自分が赦されていることの、奇跡とも言える恵みを味わっています。

今回は特にマタイ27章52-53節に目が止まりました。これは黙示録ではないかと、聖書箇所を確認するほどでした。

43頁の解説を読んで、この{不思議な現象とあり}、受け入れるべき事実なのだと、納得でした。この事実を見ても受け入れようとしなかった人たちがいるということも、事実なのです。信仰は私が選び取るのではなく、神からの選び（誤解されやすいですが）恵みなのです。

しかも「功無き我を、死を持ってあがない」（賛美歌271）のように、私の功績とか才能とか努力ではない、一方的な恵みということ、かみしめています。

この愛にお応えするために、いつも心の中心に主がおられるようにと、祈り続けたいと思います。油断するとすぐサタンの虜になってしまいます。

解説62頁の「神様にとって代わる指導者はないのです。」の文章にアメンです。（広瀬裕子）

私がユダヤ人でないせいか、「死」を現す言葉として「血」という言葉が使われていることに、少々違和感を覚えていましたが、「血」は、その生き物が確かに死んだということを証明しているという説明に、納得しました。

旧約時代、ユダヤ人に下るはずであった刑罰の代わりに動物を殺して、その血がささげられました。その血は、動物が確かに死んだことを証明しているのです。

新約時代になると、旧約時代のいけにえの動物の本体であるイエス様が、人のすべての罪を負って、十字架で死にました、その血は確かにイエス様が死なれたことを証明するものです。これは、被害者であられる神が、こともあろうに、加害者である人の罪を御子に負わせ、十字架につけたものです。そ

れによって、加害者を救済するという驚くべき方法であり、これが人の救いの道になったのです。この救いを心から感謝して受け取ります。(高橋美枝)

ヨハネ13章からは、イエス様の「告別の説教」が始まります。最後の晩餐となった過越の食事における洗足の記事は、罪をきよめるイエスの死の力を例証する部分のようです。

「過越の前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。……イエス様は夕食の席から立ち上がり、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれました。それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいで拭き始められました。こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。」イエスは、彼に答えられた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないこととなります。」シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」(ヨハネ13:1-10)

「足以外は洗う必要がありません」と語られましたが、イエス様の洗足は全身のきよめを象徴すると言われています。水浴して家に帰る者が足の汚れだけを洗い落とす慣習と結びつけたもののようです。

当時の夕食会の会場には、手洗いの儀式や足洗い用に水が用意されていました。イエス様は、これらの水を用いて弟子たちの足を洗うという、全く驚くべきことをなさいました。

弟子たちは、イエス様の言葉や行いの真の意味を聖霊が降臨した時に初めて理解することが出来たようです。(木村邦夫)

私のたましいよ 黙って ただ神を待ち望め。

私の望みは 神から来るからだ。

神こそ わが岩 わが救い わがやぐら。

私は 揺るがされることがない。」 (詩篇62:5-6)



この詩は自分に言い聞かせるようにして書かれたのでしょうか。しかしとても力強く、堅く信じて疑わない信仰から出た言葉に感じられます。

自分に対する望みではなく、「神こそ私の望みだ」と確信しているからでしょう。神様に望みを置くことができるのは、神様の側で私たちを愛して恵んでくださっているからです。

人間側の知恵や意思によってではありません。ダビデがこのように言い切れたのも、ヨブが試練の中で信仰を失わなかったのも、主の恵みによると思います。

その唯一無二の主が現在も、全く同じ恵みを私たちに注いでくださっています。私のような小さな器にもその恵みは注がれ、喜びで満たされます。

「イエスは夕食の席から立ち上がり、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。」(ヨハネ13:4-5)

三位一体の神であるイエス様が、弟子たちの足を洗いました。イエス様は弟子たちにはっきりとこう言われていました。

「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」(マタイ20:28)

神であるお方が、被造物でしかない人間、しかも神から離反してどうしようもない状態に陥っている

人間のために、世に下られて仕えてくださいました。

「このように仕えるんだよ」と行動でお示しになっているこの箇所感動します。さらにこの後間もなく私たちの身代わりとして、父なる神からの完全な断絶＝罪の処罰を受けてくださったのです。

この方のこの世での生涯と行動を、人間の知恵で理解することは不可能だと思います。信仰を通してでなければ理解できません。それこそが神の知恵です。ただ主の恵みと哀れみにより、信じる者として頂いたことに感謝します。(永井亮子)

しかし 私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかんでくださいました。」(詩篇73:23)

神様を信じて救われる前は、不平不満ばかりが募っていました。なんで自分だけが、3回も大学受験に失敗しなければいけないのか。周りの友達楽しく過ごしているのに、自分だけは、どうしてこんなに苦しいのか。と。

でも、それは、神様が私を見捨てられたのではなく、私を導くためのご計画だったのだと、今になって分かりました。

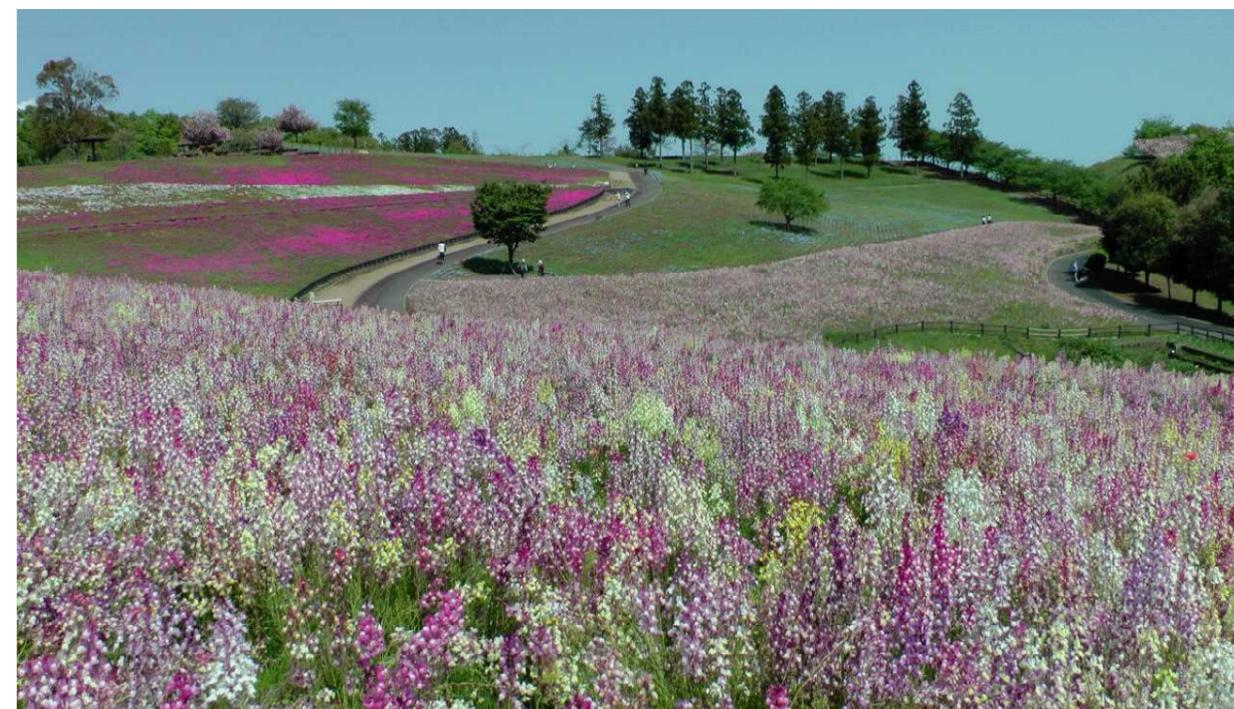
「思い返せば自分が迷ったり、豊かな人を羨んだりして心を乱している間も、神様はずっとそばにいてくださったのです。知恵の乏しい自分を諭して導き、栄光のうちに迎えようとしておられたのです。」と、「みことばを味わおう」にあります。その通りだと思います。

これからも、神様の導きに従って歩みたいと願います。(外處トミ)

生きる術 分からないまま 歩んでた

今は ただ 主の導きの中

2022年4月30日



群馬県太田北部運動公園にてキンギョ草が満開

だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てていることを、あらわにされるであろう。その時には、神からそれぞれほまれを受けるであろう。」(1コリント4:5)

この世で生きていくと、苦しみや不安なことがたくさんあります。けれど、神様は全てをご存じて、私たちをお見捨てになることはありません。だから、今日も安心して神様に委ね、依り頼んで生きていきたいと思えます。(外處光歩)

しかし私にとって神のみそばにすることが幸せです。私は神である主を私の避け所としあなたのすべてのみわざを語り告げます。」(詩篇73:28)

いつも主のみそばにすることができるといいですね。どんな時も主に目を向けて歩んでいきたいです。(外處結実)

彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。」(マタイ27:34)

神様の御子なる主イエス様は、私たちキリスト者を滅びから救うために、自ら犠牲となるためにこの世に来て下さいました。そして、父なる神様の御心を完全に果たし、十字架の苦しみを完全に受けられました。

それは、この御言葉にあるように、麻酔薬として苦しみを軽減するためのぶどう酒さえも飲むことさえされず、その苦みだけを味わわれたことからわかります。主イエス様は自ら苦しみを徹底的に積極的に味わわれたのです。

それに対し、私はどんな小さな苦みさえも逃れようとしてしまいます。そして、小さな小さな苦みさえも訪れると実につらく思ってしまうことが多いのですが、主を避け所として、救われた者であることを思い出す時、悩みから解放されてゆくのです。

そうすることが出来るのも、主なるイエス様が、私たちを一方向的に愛して下さい、私たちの身代わりとして、私たちが受けるべき裁きによる苦しみを完全に受けて下さったゆえなのです。ただ、与えていただいた永遠の平安に感謝するのみです。(外處徳昭)

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示された山に登った。17 そしてイエスに会って礼拝した。ただし、疑う者たちもいた。18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」(マタイ28:16-20)

マタイ福音書は「ダビデ王の子孫」としてのイエスの描写で始まり、東方の博士たちは幼子イエスを「ユダヤ人の王」と呼び(マタイ2:2)、この「ユダヤ人の王」という罪状書きをもってイエスは十字架につけられました(マタイ27:37)。

しかし、今や復活した栄光の主として、イエスは、天地すべてのものに権威を持つお方として臨まれました。この権威は、政治的武力的いっさいの権威を否定して、「しもべ」の道を歩み、十字架にまで神の救いのご計画に従われたことに基づく、この世のものでない権威です。

この神の御子としての主権的権威によって、イエスは、世界大の宣教命令を出されました。以前、イエス様は、その対象を「イスラエルの家の失われた羊たち」(マタイ10:6)に限定して弟子たち

を遣わされました。しかしこの宣教命令では、弟子たちを全世界に送り出されました。

3つのことが命じられています。

①「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。」である。

この命令は、世界中の人々が回心することを前提としているものではありません。弟子たちが福音を宣べ伝えることによって、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、救い主に従う者が出るようにせよということです。

②「父、子、聖霊の名において(名の中に)彼らにバプテスマを授け」。

19節は英文では、「Therefore go and make disciples of all nations, baptizing them into the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit, / NIV」です。

「名(name)」は単数形です。「父、子、聖霊」という三つのご人格(位格)がありますが、御名は1つです。全聖書の中で、「父、子、聖霊の三位一体の真理」がここに明確に示されています。

エホバの証人(ものみの塔)のグループは、三位一体を否定し、神はエホバなるお方だけ、子は被造物の頭(天使長)、聖霊は単なる霊の影響力であると教えています。聖書の真理を無視しています。

また、ユダヤ人が「名」と言う場合には、「人格」を意味します。「父、子、聖霊の名」とは、「父、子、聖霊のご人格(位格)」の意味で、さらに、「名において」と訳されていますが、ギリシャ語の前置詞 εις(エイシ)は「英文の(into the name)」で「名の中へ」の意味です。

ですから、「父、子、聖霊の名の中へ彼らにバプテスマしなさい」と意識できます。私たちは、主イエスを信じる「信仰によって、父、子、聖霊なる神ご自身の中へ結合され、三位一体の神様との生きた交わりに入ること」を意味していることがわかります。なんとすばらしいことでしょう。

③「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」

この「教えなさい」はギリシャ語ディダスコンテスと現在分詞であり、それが絶えず継続されなければならないことを示しています。

その教える内容は、イエスが啓示されたことのすべてであり、これは新約聖書という使徒的文書に、聖霊の働きによって誤りなく収められています。「守るように」は、それが単なる知識ではなく、正しい生活の実践となるべきことを言っています。

みことばを組織的、体系的に学び、そのみことばに従うことによって真の弟子となることができるのです。

このような世界大の宣教命令は、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」という栄光と勝利の約束なしには、過重な重荷となってしまいます。「世の終わり」は、今の世の完成、主の再臨によって開かれる新時代です。

「ともにいます」の「います」のギリシャ語 ειμι(エイミ)は、主の臨在が常に現在現実のものであることを意味します。

常に「います」と言われる方ご自身がともにおられる以上の力、励まし、慰めはありません。実に、この「主が共におられる」ことは、私たちにとってすべてです。なんと感謝なことでしょう。(福島勲)



貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ5月号の感想を6月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)